

(5) 分析を踏まえた指導の改善

意識調査の結果から、一人一人の児童生徒に確かな学力の定着を図るために、以下の内容を大切にしたい指導が望まれる。

学ぶことの意義や目的意識を基盤にした「学ぶ意欲」を高めるための工夫改善

【各設問の結果・分析から】

設問1「勉強は好きですか」、設問2「勉強は大切だと思いますか」、設問3「努力して勉強しなければいけないと思いますか」、設問4「自分から進んで勉強しようとする気持ち（意欲）がありますか」において「そう思う」「どちらかというそう思う」の割合が増加している。注目すべきは、これらの質問において、「そう思わない」の割合が減少していることである。これらのことから、児童生徒は全体的に勉強に対して前向きな受け止め方をしており、学ぶ意欲も高まってきていると考えられる。

一方、設問5で、児童生徒の勉強に対する意義や目的意識を見ると、「希望する職業につくなど将来の夢をかなえるため」を選んだ児童は7割を上回り、生徒は8割を上回る。「受験に合格するため」を学ぶ意義としている割合は、中学生になると急激に高くなり、中2では7割を上回る。全体として、自己の夢や進路の実現に向けて勉強しようとする意識をもっていると考えられる。

【意識調査とペーパーテストの結果との相関分析から】

設問1「勉強は好きですか」、設問2「勉強は大切だと思いますか」、設問4「自分から進んで勉強しようとする気持ち（意欲）がありますか」において、「そう思う」「どちらかというそう思う」と答えた児童生徒ほど、正答率が高い傾向が見られる。また、中学校の方がこうした意欲と正答率との関係がより顕著に表れているといえる。

【指導改善の具体】

- ・児童生徒の発達段階に応じて、多様な観点から学ぶことの意義や目的について考えさせるような体験的活動などを意図的・計画的に位置付けていくこと。
- ・学ぶことの意義や目的を社会的な存在としての責任を果たすためという視点から実践的に理解を図っていくこと。
- ・各教科等の学習においては、児童生徒の学ぶ意欲を高めるために魅力ある授業に努め、体験的な学習や仲間同士の学び合いを大切にするとともに、実生活と関連付けた学習内容等の工夫をすること。

自ら問題を解決していく「主体的な学習」を生み出すための工夫改善

【各設問の結果・分析から】

設問1「なぜ勉強が好き、なぜ勉強が好きではないか」に対する児童生徒の記述をみると、その理由が、「勉強がわかる・できる」「教科の好き・嫌い」に影響されていることがわかる。「わかる・できる」という視点での設問6「学校の授業がどの程度わかりますか」において、「よくわかる」「だいたいわかる」を含めると、授業がわかるととらえている児童生徒が増加している。具体的には、「よくわかる」「だいたいわかる」ととらえている児童の割合は7割以上、生徒は約6割であり、3年間連続して、どの学年においても増加している。これは、各学校における「よくわかる授業」

の具現に努めた成果であると考えられる。一方、「授業がわかる」を選んだ割合が、小学校から中学校へ進学すると、大きく減少する傾向は昨年度に引き続き課題である。

設問7「授業の中でわからないことがあったらどうすることが多いか」については、児童生徒の6割以上が「友だちにたずねる」を選んでいる。仲間とともに学び合うこと、わからないことを互いに聞き合うことを大切にして指導してきた成果であると考えられる。一方、昨年度に比べて、「先生にたずねる」と答えた児童生徒は減少している。

【意識調査とペーパーテストの結果との相関分析から】

設問6「学校の授業がどの程度わかりますか」において、「よくわかる」を選んだ児童生徒の正答率は80%を上回っており、「だいたいわかる」を選んだ児童生徒の正答率は75%を上回っている。また、「よくわかる」を選んだ児童生徒の正答率と「ほとんどわからない」を選んだ児童生徒の正答率との差は30%を上回り、授業がわかることと学力には顕著な相関関係があるといえる。

【指導改善の具体】

- ・各教科において一人一人に基礎的・基本的な内容が確実に身に付くよう、児童生徒が「わかる」という実感をもって理解することができる授業づくりや、個に応じたきめ細かな指導を一層充実させること。
- ・特に中1においては、学習の仕方、学習の内容、進路選択や学校生活への適応、人間関係の在り方等について丁寧な指導を行うとともに、小中学校間の連携や校内の協力体制による指導を充実させること。
- ・児童生徒が相互に信頼し、支えあって学び、生活できる好ましい人間関係が授業においても深まるよう、より一層の指導を充実させること。
- ・疑問に思ったことを自ら調べ、考える問題解決学習を充実させ、調べ方や学び方を身に付けさせるとともに、児童生徒が気楽に「先生にたずねる」ことができるような教師との人間関係づくりや環境づくりを工夫すること。

計画的に学んでいく「学習習慣」を身に付けるための工夫改善

【各設問の結果・分析から】

設問8「家庭学習の習慣化」については、家庭学習の時間をみると、「30分以下」「まったくしていない」と答えた児童生徒は1割～2割程度であり、昨年度に比べすべての学年において減少しているが、30分未満の児童生徒の割合は、小5で11%、中2で24%と学年が進むにつれて増えている。

設問9「計画を立てて家庭学習をしている」においては、「している」「どちらかというとしている」を含むと、児童の6割は計画を立てて学習をしているが、生徒では3割程度である。計画的な学習ができている割合は、中学生になると低くなっている現状がみられる。

設問10の読書については、「1日30分以上」の読書をしている児童生徒が3割程度であり、昨年度に比べてどの学年も増加している。また、「全くまたは、ほとんどしていない」児童は3割程度、生徒は4割を下回り、昨年度に比べて減少している。

【意識調査とペーパーテストの結果との相関分析から】

設問8「平日に家庭で学習する時間」において、最も正答率が高いのは、小学校では「2時間以上、3時間より少ない」を選んだ児童であり、中学校では「3時間以上」

を選んだ生徒である。特に中学校では、家庭で学習する時間が長いほど正答率が高くなる傾向が見られる。設問9「計画を立てて家庭学習をしているか」においては、計画的にしている児童生徒ほど正答率が高くなる傾向が見られる。また、どの学年も「していない」を選んだ児童生徒の正答率が最も低い。家庭での学習時間や計画的な取組と学力には相関関係が見られる。

【指導改善の具体】

- ・家庭学習において「何を、どのように」進めていけばよいのか家庭学習の仕方について丁寧に指導し、家庭学習での習慣化を図るよう、発達段階に応じた計画的・継続的な課題を設定すること。
- ・家庭での学習の在り方について、学校として学年の発達段階を踏まえた意図的・継続的な指導を行うとともに、できるだけ多くの児童生徒や保護者の声も生かしながら取り組むこと。
- ・中学校においては、生徒が家庭で計画的に学習を行えるよう、学校全体として教科間で共通理解し質・量両面から適切な課題を課すなど、家庭学習の在り方を工夫するとともに、生徒一人一人の状況に応じてきめ細かな指導を充実させていくこと。
- ・児童生徒自身が学習効果を感じ、満足感が得られるような家庭学習の工夫、計画的・継続的に努力したことが認められるような場の設定などを授業の中で意図的に行うこと。
- ・各学校が取り組んでいる朝読書や帯時間など全校一斉の読書活動の質の向上を図り、例えば、発達段階や学年段階に応じて良書に親しませるなど計画的・意図的な指導を工夫し、読書に対する意欲を高めること。
- ・教科や総合的な学習の時間などにおける学校図書館の活用の充実に努めるとともに、より質の高い読書ができるよう、家庭や地域との連携を図った啓発活動を行うなど読書環境の整備・充実を図ること。

規律ある生活ができる「生活習慣」を身に付けるための工夫改善

【各設問の結果・分析から】

設問11、設問12の「早寝早起き」については、午前7時より前に起きている児童生徒(午前6時より前に起きている児童生徒も含む)は8割を上回っている。一方、午前8時より後に起きる児童生徒は、どの学年においても全体の2%程度存在する。就寝時刻は学年が進むにつれて遅くなっており、中2になると4人に1人が午前0時以降に就寝している。

設問14の「朝ごはん」については、「毎朝かならず食べる」「だいたい毎朝食べる」児童生徒の割合はどの学年においても9割を上回っている。特に、「毎朝かならず食べる」児童生徒の割合は8割程度である。一方、「食べないときが多い」「まったく、または、ほとんど食べない」児童生徒の割合は全体の4~6%程度であり、学年が進むにつれて、その割合は増加している。登校する前に、朝ごはんをきちんと食べることで、そのために決まった時間に起床し就寝することなどは、児童生徒の生活リズムを向上させるために大変重要である。

設問13の「平日の家庭での過ごし方」について、児童生徒が平日に家に帰ってか

ら行うことで、もっとも多いのがテレビやマンガを見たりゲームをしったりすることであり、どの学年も3割程度である。この割合は学年が進むにつれて増加している。「1日に3時間以上」テレビを見たり、ゲームなどを使って遊んでいる児童生徒は3割程度である。2時間以上(3時間以上の児童生徒も含む)になると、中学校において5割程度になる。児童生徒の平日の家庭での過ごし方は、塾や家庭教師、スポーツや音楽などの習い事とテレビやマンガ、ゲームなどが、その大部分を占めていると考えられる。テレビやマンガ、ゲームなどで一人で過ごすだけでなく、友だちと遊ぶ中で人間関係を密接なものにすることは、この時期の児童生徒にとって大切なことである。

設問15「家でのお手伝い」については、「毎日かならずしている」「だいたい毎日している」児童生徒の割合は、児童では5割弱、生徒では3割を上回っている。一方、「まったく、または、ほとんどしていない」児童生徒の割合は、児童では1割程度、生徒では1割を上回っている。夕食の準備を手伝う、洗い物をする、家のそうじをするなど家庭での役割や分担をもち、家族と協力しながら規律ある生活を築いていくようにすることは大切なことである。また、進んで手伝いに取り組むことは、自己の有用感、存在感を感じたり働く喜びを味わったりすることにつながるものである。

設問16「自分のことは自分で気をつけてできる」については、「できている」と答えた児童生徒の割合は、児童では3割程度、生徒では4割程度である。「だいたいできている」を含めると、児童生徒の8割程度が自分のことは自分でできているととらえ、学年が進むにつれてこれらの割合が増加している。自主的な姿勢や主体的に取り組もうとする意欲は、「自分もできる」「できるようになってきた」という自信によってより一層高まるものである。

【意識調査とペーパーテストの結果との相関分析から】

設問11「平日は何時に起きているか」において、早起きしている児童生徒は正答率が高い傾向が見られ、小学校、中学校のどの学年においても「午前8時以降に起きている」を選んだ児童生徒の正答率が最も低い。設問14の「朝ごはん」においては、「毎朝かならず食べる」児童生徒ほど正答率が高い。また、食べていない児童生徒は正答率が低くなるという傾向が見られ、特に小学校でこの傾向は顕著である。規律ある生活ができることと学力には相関関係があるといえる。

【指導改善の具体】

- ・地域や家庭との連携を図り、朝の時間帯がどの児童生徒にとっても楽しく充実したものとなるよう、地域や家庭での「朝の読書」や「朝の運動」など具体的な活動を実践できるようにすること。
- ・心身の発達に必要な睡眠時間を確保するためにも、「早寝早起き、朝ごはん」について考えさせるような指導が必要であり、特に午前8時以降に起床するなど基本的な生活習慣に乱れがみられる児童生徒については、保護者との連携を図り個に応じた指導を行うこと。
- ・朝食の必要性については家庭との連携を図り、家庭での食生活について指導して「食べない」児童生徒をなくすように努めること。併せて朝食をとっている児童生徒に対しても、栄養のバランスのとれた朝食の内容に着目し、望ましい食生活についても考えさせるようにすること。
- ・1日の生活の中で、テレビを見たりゲームなどで遊んだりするためにどの程度の

時間が望ましいのかを家庭での理解のもと、自分で考えさせたり毎日や1週間の計画的な過ごし方を考えさせたりして、自分で自分の生活を律していく力を高めていくこと。

- ・ ネット社会の犯罪が問題になっている現代において、コンピュータや特にインターネットの利用など、望ましい活用の仕方を指導していくこと。
- ・ 学年の発達段階や地域の状況を踏まえ、屋外で遊ぶことやその在り方について考えさせたり、地域の行事などに進んで参加するよう助言したり、読書等にあてる時間を増やしたりするなど、家庭において一層充実した生活がおくれるよう働きかけること。
- ・ 家庭において、手伝いなどによって責任を果たすことの大切さを考えさせ、手伝いを通じて子どもとのコミュニケーションを深めることができるよう働きかけていくこと。
- ・ 周りの大人は「できていること」を見付け、認め励ますとともに、「よりできるようにしていこう」「できることをさらに増やしていこう」といった意欲がもてるよう学校や家庭において指導していくこと。また、「ほとんどできていない」児童生徒についても、「少しでもできるようになったこと」を認め、自分の生き方、過ごし方に自信をもたせていくこと。

自ら生活を律していく力を育てる「家庭環境」づくりの工夫改善

【各設問の結果・分析から】

設問17「基本的な生活習慣に対する保護者の意識」については、6割程度の児童、5割程度の生徒が、自分のことは自分ですよう声をかけられたり注意されたりしている。「よくある」「ときどきある」を含めると、児童の6割程度、生徒の5割程度が、家の人から声をかけられたり注意されたりしているが、学年が進むにつれて、これらの割合は減少している。これは、成長するにつれて自分でできるようになったり、保護者が基本的な生活習慣については声をかける必要がないと判断したりしているからであると考えられる。

設問18「社会生活を営む上でのマナーなどへの保護者の意識」については、5割以上の児童生徒が、「あいさつやお礼」「言葉づかいや服装」「約束を守ること」について家の人から声をかけられている。どの学年においても「よくある」「ときどきある」をあわせると、5割以上の児童生徒が家の人から言われているが、中学生になるとこれらの割合は減少している。このような社会生活を営む上でのマナーやモラルは、小学生のうちから繰り返し声をかけたり、日常的に気を付けるよう声をかけたりして家庭において身に付けさせていくことが大切である。

設問19「家庭における家族とのコミュニケーション」については、「家の人とよく話をしている」と答えた児童は、小5では4割程度、小6では4割を下回り、中1、中2と学年が進むにつれてその割合が減少している。設問は、進路や友だちのことだけでなく、趣味のことなど幅広いことについて「話をするか」を聞いたものであったが、「少し話をする」を含めた割合は、小学校では8割程度、中学校では7割を上回る。「ほとんど話をしない」と答えた割合は中学生では2割程度である。また、どの学年にも「まったく話をしない」児童生徒が1割未満いるなど、家庭においての

コミュニケーションが十分に図られていない児童生徒がいることがうかがえる。

設問20「家庭における家族からの賞賛・励まし」については、家の人からほめられたりはげまされたりすることが「よくある」と答えた児童は、小5では4割弱、小6では3割を下回り、中1、中2と学年が進むにつれて、その割合が減少している。「ときどきある」を含めた割合は、小学校では8割弱程度、中学校では7割程度である。「あまりない」と答えた割合は、学年が進むにつれて増加し、中学校では2割程度である。また、どの学年にも「まったくない」児童生徒が1割未満いるなど、家庭におけるコミュニケーションの中身としての賞賛や励ましを受けていない児童生徒がいることがうかがえる。

【意識調査とペーパーテストの結果との相関分析から】

設問19「家庭における家族とのコミュニケーション」においては、「家の人とよく話をする」を選んだ児童生徒ほど正答率が高く、「まったく話をしない」を選んだ児童生徒ほど正答率は低い。設問20「家庭における家族からの賞賛・励まし」においては、「よくある」を選んだ児童生徒は正答率が高く、「まったくない」を選んだ児童生徒ほど正答率が低い。こうした家族とのコミュニケーションや家族からの認め励ましについては、自ら生活を律していく力を育てるもとであり、学力との相関関係があるといえる。

【指導改善の具体】



- ・家庭と連携を図り、生活習慣が確実に身に付くよう小学校の低学年段階から指導するとともに、「自分のことは自分でできるようになった」成長を認め、励まして自主的に取り組んでいくことができるようにすること。
- ・家庭において、学校や友だちのことだけでなく、趣味や進路など様々な面から話し合い、子どもの考えや状況を保護者が把握して子ども理解に努め、ふれあいの時間を多くもてるよう働きかけること。
- ・家庭において、学校での学習の成果のみならず、部活動や習い事などでの努力の過程や日常生活の中で本人が心がけていることなどについて、ほんの少しの成長を見届けて励ますことで、本人の自信を育てていくような働きかけを啓発していくこと。